



その想い



第5号

発行人：谷泰智
28年9月3日発行

☆法話の機会をいただきました



少し前のことになりますが、5月23日に長浜のヘルパーステーションはち、にて法話をさせていただきました。

私にとって人生初の法話の機会でした。事前に話す内容を作文形式で仕上げおき、それを軸に場の雰囲気に合わせて割愛していく作戦でした。

案の定、実際に話せたのは3分の1程度でしたが、当日のテーマに据えていた『仏教の智慧』については割としっかり説明ができました。

その内容としては、仏教の根本思想である縁起に始まり、菩薩道実践の要とされる六波羅蜜までを関連させて専門用語なしでお伝えするというものでした。

ちょっと固い内容ではないか、という思いも私の中に確かにありましたが、終わってみると予想以上に皆さん内容を把握して下さり、真剣に耳を傾けてくださいました。

平易な言葉で解りやすくというのが今回の狙いでしたが、やはりまだまだ私が至らないのは表現の仕方があると痛感しました。ただ解り易いだけではダメで、聴いてくれる方を歓喜させるような表現力が話をより豊かにするのだらうなと思いました。そんな私を省みるにつれて、御釈迦様がなされた対機説法（理解力や社会的立場の違いに合わせて巧みに表現を変えて説法すること）とはいかに素晴らしいものであったかと、ため息交じりに想像する次第です。

※来る9月25日にも寺にて法話を催しています。

☆お彼岸のこと（前編）

今年の秋のお彼岸は9月19日から25日までの1週間です。そして秋分の日がちょうど中日の22日になります。

彼岸とは彼方の岸を略したもので、つまりは向こうの岸という意味です。大本の由来は2500年前のお釈迦様にさかのぼります。

お釈迦様は出家をされたあと当時の慣習に習い、ある林の中で6年間にわたる厳しい苦行をなさります。しかし、行き過ぎた苦行の過ちに気づき、その場を離れ川の中で沐浴をされ6年間の垢を落とされます。

そして向こうの岸（彼岸）に渡り、近くにあった大きな樹の下で静かに瞑想をなさり、遂に悟りを開かれたと言われています。悟りのことを古代のインドではボーディと呼び、それが漢語で音写されたもの菩提となり、以後その大きな樹は菩提樹と呼ばれるようになり、その仲間は皆さんが日頃お使いの数珠としても加工されています。

さて、そういう訳で本来の彼岸という意味は、御釈迦様が至られた向こう岸という意味での悟りの世界を表しました。しかし後世に曲解が進み、彼岸=あの世（死者の世界）という考えが定着していきます。さらにそこから、間を流れる川のことを『三途の川』として日本人の死生観にも取り込まれていきました。

日本では仏（ホトケ）と言えば亡くなった人と思われがちですが、上の説明かわお解りのように本当は『仏=悟った人』が正解です。さらに大乘仏教の中で解釈が拡がり、御釈迦様=仏様→その他多くの仏様、という世界観になります。

そして、この多くの仏様の中に皆さんが一度は耳にしたことがある、大日如来や阿弥陀如来や薬師如来がおられます。では、なぜ彼岸は年に2回あり、春分の日と秋分の日が中心になっているのか・・・？その疑問には実は阿弥陀如来という仏様が大いに関係しているのです。

この続きは来年3月頭に発行予定の来々号でお伝えしたいと思います。どうぞ、お楽しみに。

